

難民の医療支援や国際交流に興味

医大生 8 人が国際保健で学習

獨協医科大学医学部 4 年の学生 8 人が 6 月 27 日、城西病院を訪問して、「国際保健」をテーマに、公益財団法人「茨城国際親善厚生財団 (IIFF)」の活動を題材として、国際医療支援や国際交流について学びました。この講義は、公衆衛生学実習の一環で、「国際保健」「母子保健」「産業保健」などの 14 テーマの中から学生が選んで、学習しています。

同大学の国際協力支援センターの千種雄一・国際交流支援室長、同室の高岡宣子助教とともに訪れた学生たちは、アフガン 4 兄弟としてアフガン難民支援などに活躍、日本国籍を取得したアマデアル・亜来春さん、アフガンの母と呼ばれて難民支援を行ってきた通所リハビリセンター「茶釜の湯」の荒川邦江副理事長が、34 年間にわたる海外医療支援活動について講演。海外の支援の大変さや海外の人たちとのつながりなどを語りました。また、鈴木茂企画室長が城西病院をはじめとした達生堂グループについて説明。総合内科の村田智史医師が、城西病院で治療したマラリア患者の赤血球に侵入したマラリア原虫の血液を顕微鏡で見せて解説するなど、幅広い学習を行いました。

学生たちは、「アフガンの医師の研修制度を教えてください」「アフガンで言葉の問題はないのですか」など興味を持って質問。城西病院内を見学したり、茶釜の湯を見学し、職員たちにいろいろ質問をして、海外医療支援のみならず、地域医療や福祉についても関心を持って学んでいました。

平成 29 年 6 月 28 日

